

山村の古民家と木造校舎の役割

アニメ「おおかみこどもの雨と雪」の世界より

中新川の愉快的仲間たち

1. はじめに

空前のヒットとなったアニメ「おおかみこども、雨と雪」では、自然にいきる母と子のきずなをテーマとして、(山村の)原風景や古民家・木造小学校を舞台に人間ドラマが生き生きと描かれている。これが、鑑賞者を大いに感動させていた。また、(建築)専門家でも、アニメの魅力的な写実描写により、原風景や古民家に改めて惚れ直したというところが正直なところである。

我らは、古民家や木造小学校について、専門家として今一度、惚れ直すほどの魅力や意義を考えてみることにした。

そこで、直ちに古民家と木造校舎を視察し、我ら住人あるいは教師の方々と語り合い、古民家と木造校舎について少し理屈っぽくまとめてみた。ご覧ください。



アニメの舞台となった古民家と周辺風景

2. アニメの舞台の概要

舞台となった地域は富山県東部にある、平安期に真言密教の寺院(日石寺)で有名な大岩一帯の山麓の山里である。

平安期以降の南北朝期のころ、相模から来た豪族土肥氏が富山平野東側一帯を支配し、この地にも山林を生業として定住した。当該家の持ち主である山崎さんも土肥氏の系列である。

当地には、土肥一族の立派な家がいくつもあったと思われる。このうち山崎さんの家(古民家)については、明治20年(1887年)に築造されたという(築126年)。

時代が下るに従い、山の方々が里に下り、山崎さんもまた8年前に山を下りた。その際に、山崎さんは家(古民家)について、取り壊すにしのびないとして活用の道を選び、近くの山に来るハイカーのための無人



古民家、漂としたいでたち

休憩所として、あるいは地域の会合の場として開放した。皆さんからは、古民家は「みんなのいえ」と称されて親しまれていた。

そうこうしているうちに、アニメ制作の細田守監督が3年前にやってきて、当該古民家がアニメの舞台に決まった。その後、ロケ隊が頻繁に訪れたという。

映画がヒットしてからは、映画で感激された方々が

当地を訪れ、多いとき日に20人にも達している。(今では100人程も、多くは県外、しかも何回も訪問)

映画ファンのうち熱烈な方が中心となって、献身的な対応で多忙な山崎さんを助けるためにサポーターズというクラブが設立され、皆で古民家と風景を守り今日に至っている。

写真は、古民家のアプローチ、正面、縁側、大広間、囲炉裏のある居間の順に載せた。

なお、当該地では、戦後疎開には200軒あった家が現在では2軒のみとなっている。



当該集落、水田風景、

3. 当該地の風景

当該地は大岩川をさかのぼっていったところである。ある程度さかのぼると、浅生集落がある。ここに自然の中で子どもをすこやかに育てることを目的とした「あそあそ自然学校」があり、子どもたちの声が当地一帯にこだましている。

ここからさらに奥に行くと、大きな谷にでる。そこから一帯には美しい棚田と集落がある。田植えの頃は、水田に水が張られているので、棚田が鮮明に浮かび上がるほどである。

なお、当該地一帯からは富山のシンボルである立山がみえない。これが幸いしているのであろうか、周辺の低い山々が何かしら落ち着いた雰囲気醸し出している。



棚田

4. 今なぜ古民家や木造校舎なのか

4. 1 アニメの舞台と人間ドラマ

アニメの概要を簡単に紹介する。母と子ども2人が住みにくくなった都会を離れ、田舎の山里にきて農業をいとなみながら、自然の中で子どもが母の愛のもとたくましくすくすくと育っていく、というのがストーリーである。

このアニメを観て、なぜ人が感動したのであろうか。当該地を訪れた方々に聞くと、女性の方々は「母と子のきずなや子育て」に感動といわれ、男性の方々は「なかなかうまくいえない」けれども感動したとのことであった。また、古民家との関係ではどうですかと聞いたところ、「匂い、澄んだ空気、落ち着く」といった感覚的なことは当然の事、「古民家とその中に住む方々に魅せられ感動した」というようなことをいわれる方も

おられた。まさに、感動の核心は人間ドラマだったのでしょ。だから、彼らはアニメの舞台に(複数回)来て、舞台を「見る」のではなく舞台(で演じられるドラマを)「堪能する」のである。

ここで、我らは、皆さんがかくも感動したその背景として主に古民家について多少専門的に理屈をつけてみることにする。

4. 2 原風景と古民家の特徴

古民家の良さを市民の観点から分析するために、今(現代)を起点として時間をさかのぼって生活面から論じてみよう。ここでは、観点となるキーワードは「囲い、エネルギー、コミュニケーション、かまい過ぎ、遠慮、エコ、音、感触」である。

(1.1) 建物内の囲い； 建築の囲いによる空間構成そのものが人間の行動に制約を加えているのではなかろうか。まず学校では一見広い空間としてのクラスという囲いがあり、逆に住宅では細かな部屋割りという壁による囲いがある。最近、子供には自閉症が多発している。囲いと関連させる研究者も多い。

一方、古民家には、そのようなバリエーションもなく、しかも空間は隙間だらけそのものである。子どもの成長に障害となることはなにも無い。アニメでも子供が家の中を走り回って伸び伸びしていたことが印象的である。

(1.2) 建物外の囲い： 通常住宅回りや団地回りなど、建物外周に塀がある。これに見慣れている人にとっても、そのような障害のまったくない山村という自然が自然と受け入れられる。しかも、人は山村に居るだけで、現代特有のイライラがいつしか落ち着きに変わっていく。当地への来訪者は数時間にもわたりただずんでいかれる。

(1.3) 外界と融合する空間： 古民家では、囲いが開放的なことに加え、自然の中に立地しているので、自然ののどかさや生命のいきづかいが室内にまで及んでいる。これが人に対しては心をのどかにかつ温和にし、古民家そのものに対し自然の匂いとなるのであろう。

(1.4) コミュニケーション； 現代建築は(家)の中と外をしっかりと分離しているので、ご近所さんとのコミュニケーションには努力して実現させるものといった感がある。これに対して古民家には縁側があり、(家)の中と外が連続していて、どこまでも見通せる。この見通しは、家のみならず外でも集落でも一緒である。家の中の生活の匂いが外にまで流れている。そんな雰囲気のもので、コミュニケーションはごく自然に図られている。



古民家の縁側でのくつろぎ



古民家の大広間



古民家の居間と薪ストーブ

(2.1) 何でもそろっていると考えなくなる；

何もない広場で子どもが集まると、どうやって遊ぶかを皆で考えそして遊ぶ。何もないとは押し付けけない

ということである。しかしながら、都会では野外遊具を置いて決められた遊び方を押し付け、子どもの思考能力がむしろ萎縮する。家の中でも一緒に遊べる。子どもにとって、遊びは、本来学びでもあり、勉強でもあるからである。

(2.2) 家の囲い(続)； 古民家の囲みのない様相とはまさにそうしたものであり、住人がどうやって営もうかと、考えながら多様性をむしろ楽しむことができる。それを可能にするものが古民家なのである。

なお、ここでの議論はあくまでも現代と昔の対比であり、古民家のもつ、その地域の気候風土に合った住まい方の知恵や文化性については省略する。

(2.3) 遠慮のいらぬ空間： ヒステリックな雰囲気、漂いぎみの都会では生活には遠慮が必要であり、囲いが必要とされている。一方の山里の古民家では、囲いのないことがおおらかなコミュニケーションを図り、例えば子どもが大きな声で語り合い走りまわるように、住人の行動が束縛されず実に自然である。

(3.1) エコ； 最近便利になるのはいいが、洗面所では手を出せば水が出て、廊下を歩けばスイッチを入れなくても電灯のオンオフができてしまう。人間は少しずつ何も考えなくなっている。

ある研究者は、白熱電灯の家と LED 電灯の家とでエネルギー消費を調べた結果、白熱の家の方が断然に消費電力が少ないことを結論した。理由は、前者の家では住人自ら考えてこまめに電灯(のスイッチ)を入り切りするからである。

では、古民家はどうであろう。白熱電球云々は別にして、古民家ではのどかな自然のもとでエネルギー浪費は似合わず、節約の心がけが自然とできていくものといえる。

なお、上記の話については最新技術の否定と受け止める方がおられるが、そうではなく、最新技術の使いこなしが大事であると主張しているのである。

(3.2) 音環境； 現代建築は遮音に気を配っている。自分の都合以外の音は騒音としているので、公園で遊ぶ子どもの声も騒音なのである。研究によれば、音なしの世界では人は余計に落ち着かなくなるという。

古民家では、もともとの立地が山里であることもあるが(平地であっても)、外からの音や気配も中への侵

入は歓迎なのである。少なくとも、遮音のないことがかえって落ち着ける空間が醸し出されている。

(3.3) 感触と視線； 木造校舎にしてもしかり。なぜ木造なのか。空間の構成が硬い無機質な囲みによるものではないからであろう。確かに、隙間の多い木造の開放空間では、壁であっても閉じられた空間ではなく、しかも、壁そのものが木であるゆえに木のぬくもりという暖かさで寄り添っているという印象が醸し出されている。これが人にやさしいということである。

4. 3 古民家の現代的役割

以上のようにみえてくると、古民家が最初から種々要因を考慮した設計されていたという訳ではなく、現代建築と比較して初めてその良さがにじみ出てくるかのようである。では、現代建築がなぜ反面教師になっているのだろうか。

詳細は略すが、個々の技術は個々の対象に限定されている。種々の対象が絡む場合に不都合が起これば個々に対症療法するだけの事であり、何の解決にも届かないこともままある。よって、今の技術がバランスを欠きながら複合化・肥大化していることを認識して、複合以前の段階まで時間を巻き戻したところからの検討が必要といえる。古民家はこうして現代に問題を突き付けているともいえるすぐれものなのである。

そして(建築の)設計について一言。設計において機能の効率化は人間力を奪うことにもなり兼ねないので、機能と人間力とのバランスを考えたいものである。

◆すこしまとめる：古民家と生活の特徴

古民家の開放的な囲みと単純な空間構成が住まいの多様性と生活考を可能にし、自然と集落とのかかわりをも密にする。また生業の拠点としての躍動感も手伝って、自然のなかで健康的な育があり、愛情や感性など人間性が醸成されていくといえる。

現代建築の中での生活では、得てしてそうしたことを忘れがちである。

5. 田中小学校の保存再生について by K氏

「風も緑だ 若葉の朝・0・・・」で始まる、高島 高 作詞、高本 東六作曲の校歌がある。明治6年9月、田中村西光寺を仮校舎として設置されたのが田中小学校

の始まりである。

その後、校舎は移転を重ね、現在地に新築されたのが、昭和 11 年 4 月、玄関前にある三本松もその当時移植されて、以後 77 年間県内唯一の現役本造小学校である。

昭和 55 年 2 月に、新体育館が完成され、その為本造の講堂が解体された。(ステージは総檜造りであった)

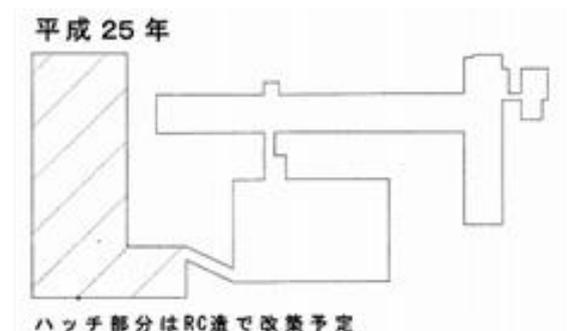
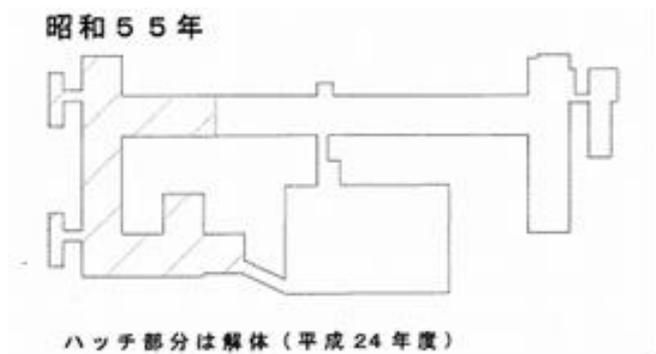
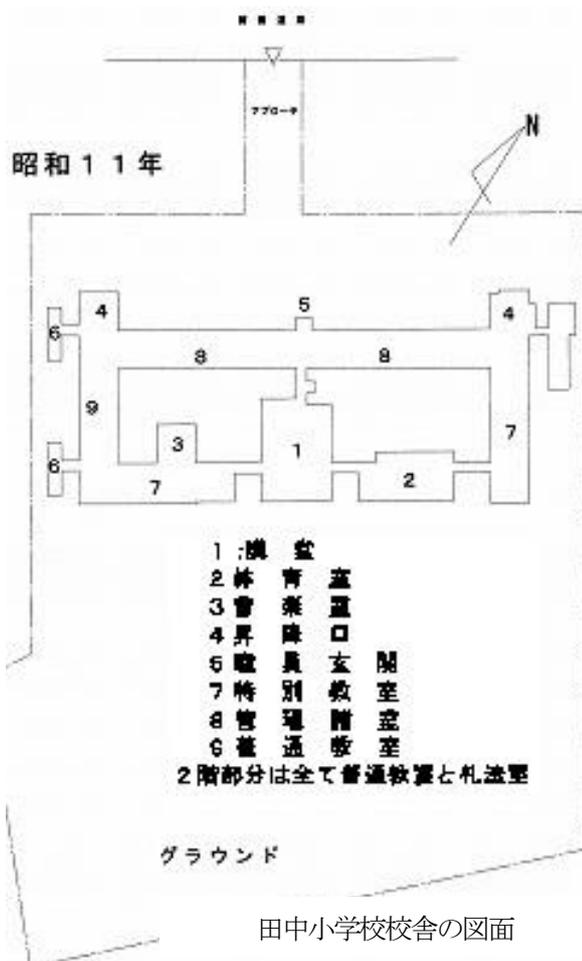
昭和 61 年から 63 年にかけて大規模な改修工事が行われ、床下の補強、天井の張替え(当時としては、かなり高価な布張りやラフン材を使用していた)

昭和 62 年「富山建築百選」に大沢野町の船疇小学校(現在は解体去れ RC 造となっている)と共に現役本造小学校として選ばれている。

おりしも、昨年より災害時の避難施設として、ふさわしくない、という理由で全面解体し、鉄筋コンクリート造に建替えるとの話が突然持ち上がる。反対する組織も無く、人も居ない状況で話が進み、建替への基本計画も無く、実施設計に入る状態であった。



田中小学校校舎正面



偶然にも、アニメ映画「おおかみこどもの雨と雪」がヒット、子供たちが通う小学校を田中小学校がモデルとなり見学者が多数押しかけ、存続を求める声が全国から寄せられ、解体寸前であった校舎に待つたがかかった。

正面側校舎を残し、他は解体しRC造として設計変更し入札が行われようとしている。(災害時は危険だから全面解体、存続を求める声があるので正面側を残す、残した校舎の耐震補強は何も示されないままであり、もし示されるならば、解体された校舎も同じである。)

以前より、現校舎のままで、耐震補強と大規模改造を行えば市の建築遺産と考えていたが、定年退職となり、次の担当者に引き継いだ、なんら検討されず、ただ本造で、築75年を経過ということで全面解体と結論付けている。



田中小学校2階、廊下と教室

田中小学校階段、面々では昇降口

校長室に保管されている資料によれば、当時の滑川町の全予算の約40%、14万円の事業費、施工は加藤組、今では想像できないが当時の町長加藤金次郎の会社が随意契約で請け負っている。

木材はほとんど佐渡の松材、佐渡の相川から生地まで船で輸送し、その後、荷車などで滑川に運ばれている。

大工、左官、などの職人たちは全て常用で雇用され、滑川の職人達が総出で従事している。栗石や子砂利など、児童達が毎朝、浜で石を拾って学校へ運んでいる。まさに、父母や子供達を巻き込んだ一大事業であつたらしい。

残念ながら、一部を残し解体となったが、残された本造校舎の保存・補強計画はどんな方法で？まだ発表されていない、今後注視し、意見を述べてみたいと思う。

◆ コーヒーブレイク 卒業生は語る

今回は、田中小学校卒業生である T 氏夫妻にも加わり、当時の田中小学校を語っていただきました。;

90 歳の母親が小学 6 年生の時に今の校舎の築造があり、旧校舎から椅子を運んだって言うておられました。

私の子供の頃はよくかくれんぼをしたものです。特に階段室の裏の方は何かしらわくわく感があって隠れ家でしたね。また階段の 1F 欄干の頂部が桃のように丸い(一番下の写真参照)ので、皆で触りまくりました。そのせいか写真にもあるように今も光ってます。それから直線で 100m もある廊下をよく走ってました。



仏間、地獄絵図と鎧

6. 映画を観て

6. 1 by D氏

(1) 古民家： 立山連峰の麓に抱かれて建つ家は、三人家族を大なる自然の力で育てていく。家に移り住んでから旅だちまで、家は心の大切な処に影響を与え、三人が成長していく姿に、目が離せなくなっていた。でも、根底に流れるメッセージよりも、なぜと思える事もあった。それは、私自身母親の親の立場になって、観ていたシーンがあったからです。

古民家とは、文字の通り古い家のことである。あのような家を現状のままに維持するだけでも、かなりの資金とエネルギーが必要です。主の居ない家は、どことなく寂しく悲しい佇まいをしています。理想だけで、古民家のエッセンスを味わいに来る人達には、判らない苦労があるはずです。

これらの問題をどう支えていくか。これがこれからの古民家の課題であろう。この映画を観て、一人でも多くの方がこの事に気付いてもらえれば、古民家関係者の方々も喜ばれる事と思います。

(2) 木造校舎：滑川市立田中小学校 見学後、私自身卒業した木造校舎滑川市立浜加積小学校での、六年間の思い出が甦ってきました。二宮金次郎銅像前での入学・卒業写真、ささくれだった廊下雑巾がけ、石炭ストーブ弁当温め、豚の世話、などなど……

校舎の隅々の詳細を観るにつけ、木に対するぬくもりは時の流れと共にすこしずつ変化し、大人になってからもその良さを感じ続けるものではないだろうか。建物とそこに住む人または関係者は、お互いに励ましあい協力しあって生かされているのだと思いました。

6. 2 by A氏



水田跡地から古民家を見る

なんの予備知識もないまま、ビデオ鑑賞しました。

このアニメは、地元上市、滑川の小学校を舞台として描かれており、監督さんも上市出身の方とか、最初拝見した時は、何なんだろうか疑問に包まれておりましたが、画面が進むにつれて少しずつ判ってきて、舞台となった滑川の田中小学校の階段は本造りの懐かしい香りのもが描かれており、 続いて、上市浅生の民家では、畑の端にある石がそこにあった。 民家での間取りも同じで、雨と雪が駆け回っている様子が浮かんでくる。

作者は、何を伝えたいと、意図されたのでしょうか、雨は野生に帰り、雪は人間界へ、もっと自然を大切にしようと、訴えているような、雪と雨は、このあとどうなっていくのだろうか、 謎が謎を生み余韻を残しつつ、 ふと気が付くと、道端の小川に、清らかなミズバショウが、我々を送ってくれた。

し、子どもも涙し、そして周りの皆さんも涙です。

- ・古民家で日常をすごせれますね。
- ・家族の方が多いですね。
- ・子どもがお絵かきしたり、絵本を読んでもらったり、しまいに家の中を走り回ってにぎやかこのうえなし。
- ・訪問者同士で会話なんてびっくりですね。
- ・皆さんにとって古民家は自分の家のようなですね。

8. 古民家と風景の保全および活用

(1) なぜ保存か； これについては、古民家と原風景を堪能したいから、風景をなす古民家は絶対あってほしい。それに、上記論評のように古民家が現代へ警鐘を鳴らし続けて欲しいし、古い建物の生命を奪う現代の理不尽さに抗議もしたいからである。

(2) 保存の実際： 当該古民家もアニメでヒットする前までは朽ち気味のものであったが、アニメ舞台として人の手が入った。ヒットしてからは、地元の方が常駐するようになり、古民家が来訪者と共に息遣いをするようになって蘇っていた。人とのかわりが保存再生そのものである。

(3) 活用に際して； 動態保存の活用としては、(各地でみられる)観光地の商業施設の方向ではなく、古民家の現代へのメッセージが生き生き続けさせる方向が目指されている。しかも、そこにただずむという日常が自然と受け入れられ、(自販機一つも不要とし)現代を忘れるかのように原風景・古民家の舞台での人間ドラマが堪能できるようになっている。これが活用の実際であり、とにかく息づいていることが何よりも魅力であり、何かしらの力強さが感じられる。

(4) 不便さが訪れる方を選別； 古民家を訪れている方々は、古民家を守っている地元の方々と何かをしたいとの思いを持って全国および外国から集まってこられる方々であり、不心得の方はいない。理由は、当該地が不便だから、話題性だけで来訪することはほとんどありえないのである。このため、多くの心ある方々(都会の方も)は里から歩いて当該地一帯の雰囲気を楽しまされることなく堪能することができる。ここは、道路を拡幅しないことになっており、商売主義の入る

余地は全くないという。我ら安堵している。

(5) 皆で参加型の活用； 当該地では、来訪の方々や地元の方々が互いに語りの輪をつくり、あたかも大家族のように共に空間を満喫し共に時を過ごしておられる。そして皆さんが家主となり(遠隔地)地元民となつて、その思いが古民家再生にも自然と大きな力に変わり、全国ネットワークの充実や賦役活動への積極的参加に加えて、なによりも今後の種々問題に対する問題解決能力が醸成されている。

すなわち、保存再生には一般に「やれ資金が、やれ補助が」といったことを先行させることが多いなかで、当該地では問題解決能力を皆さんで高めていくといったことも大家族的コミュニケーションが結果的にそうさせているように見える。こうした点が他に類を見ないユニークなものであり、コミュニケーションのヒューマンネットワークそのものが保存活用なのである。

9. おわりに

今回のアニメにより保存再生を深く考える良い機会を得た。これまでは、古民家を含めて木造建築について専門的な役割を考えていただけに、原風景や古民家を鑑賞し堪能するという行為を通して謙虚にかつ熱く論議できた。これは大きな成果であると思っている。以下に、スパイスのきいた結論を述べる。

今の建築はバランスを欠きながら種々の技術を複合化した産物であるから、そのことによる弊害が随所にみられるようになってきた。そこで抜本的な対処として、現代の技術複合以前の状態にまでさかのぼっての検討が必要と考える。これが古民家を含めた木造建築の現代へのメッセージであり、これを可能にしたのは現代を反面教師として蘇った古民家を含む木造建築である。もちろん、そこには人間の愛があり育ちがある。今後に向けて大いに考えていきたいものである。

最後になりましたが、古民家の持ち主の山崎様、田中小学校の教諭の方、サポーターズの方々、建築士会の方にはお世話になりました。記して謝意を表します。

皆様、最後まで読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。